

2026. 3. 19



地域日本語支援ニュース こだま 第465号

ともに生きる
～地域で、日本で、そして世界で～

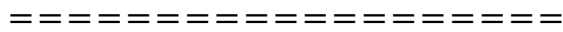


★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部 : <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.htm>

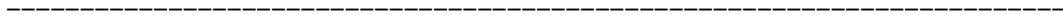


■多文化共生の地域づくり■

2011年3月11日、東日本大震災が発生。当時、仙台国際交流協会（現在の仙台観光国際協会）に在籍していた菊池哲佳（きくち あきよし）さんは、その夜から即「やさしい日本語」をつかった外国人支援を開始しました。

15年たった今、外国人市民と「ともに生きる防災」の理念を語っていただきます。

菊池さんは現在も、多文化社会専門職機構理事・事務局長、明星大学准教授として、多文化共生の地域づくりに取り組まれています。



「つながり」を育む地域日本語教室の可能性—東日本大震災から15年—
明星大学人文学部国際コミュニケーション学科 准教授 菊池哲佳

◆ 東日本大震災から15年

2026年3月11日に、東日本大震災から15年が経ちました。東日本大震災は2011年3月11日に発生し、未曾有（みぞう）の被害をもたらしました。亡くなった人は19,782名にのぼり、いままも2,550名の方が行方不明です。

東日本大震災のあとも、わたしたちは日本でさまざまな自然災害を経験してきました。多くの方が知っているように、日本は地震が多い国です。例えば熊本地震（2016年）、北海道胆振（いぶり）東部地震（2018年）、能登半島地震（2024年）がありました。地震だけではなく、豪雨（ごうう）や台風などの水害も起きています。平成30年7月豪雨（2018年）、令和元年東日本台風（2019年）、令和6年能登半島豪雨（2024年）では大きな被害がありました。そのほかに、火山噴火（ふんか）もあります。御嶽山（おんたけさん）噴火（2014年）では、たくさんの方が亡くなりました。富士山もいつ噴火してもおかしくないと言われています。

◆ 多文化共生の地域づくりと防災

また、地域社会では、さまざまな言語・文化を背景にもつ人が暮らすようになってきました。日本に暮らす外国人は、2011年6月にはおよそ205万人でしたが、2025年6月にはおよそ396万人まで増えています。東日本大震災が起きた15年前と比べると、2倍近くまで増えているのです。

このように、日本には多くの外国人が暮らすようになっていますが、日本での防災知識を持たない人も少なくありません。例えば、外国人の場合には、大きな地震の揺れが起きたときには、あわてて外に飛び出さずに机やテーブルの下にもぐる、という基本的な動作を知らないこともあります。また、災害が起きたときに流れる日本語の災害情報が理解できなかつたり、受け取った情報が身を守るための行動につながらなかつたりする可能性もあります。

このようなことから、言語や文化に関わらず、だれもが安全・安心に暮ら

すことができる多文化共生の地域づくりを考える上で、「防災」は重要なテーマだと言えるでしょう。

◆ 災害時に生かされた平時の「つながり」

それでは、だれもが安全・安心に暮らすことができる多文化共生の地域づくりを進めるために、わたしたちができることは何でしょうか。わたしは、多文化共生時代の地域防災を考える上での大切なキーワードの1つに「つながり」があると思います。わたしは東日本大震災のときに、宮城県仙台市で、国際交流協会のスタッフとして、外国人被災者の支援に携わりました。災害情報を英語、中国語、韓国語、「やさしい日本語」に翻訳し、ラジオ、インターネット、電話、避難所（ひなんじょ）の巡回（じゅんかい）などを通じて、外国人被災者に届けました。この活動の中で生かされたのが、ボランティア、ラジオ局、外国人住民のグループなどとの日頃からの「つながり」でした。ふだんから多文化共生の地域づくりで共に活動をしていた市民が、日本人・外国人を問わず、ボランティアとして支援活動に参加してくれました。ラジオ局が、多言語でのラジオ放送に協力してくれました。災害時に生かされたのは平時の「つながり」だったのです。

◆ 「つながり」を育む（はぐくむ）地域日本語教室

このような「つながり」の大切さは、その後の災害でも言われています。熊本地震（2016年）のときに被災地で外国人を支援した人も、大切なのはふだんからの「つながり」だったと話をしてくれました。また、能登半島地震（2024年）の後、わたしは石川県の地域日本語教育に関わる人たちが集まる会議に参加する機会がありました。そのときも、多くの参加者から聞かれたことは、ふだんからの「つながり」の大切さでした。日頃からの日本語教室での交流を通じてつちかわれた「つながり」が、災害時の支え合いにも生かされたという話でした。

このように、日頃からの活動や交流を通じた「つながり」が、災害時の支え合いにもつながります。とりわけ、地域日本語教室は日本人と外国人が共に活動し、交流する多文化共生の重要な拠点（きよてん）であり、居場所です。地域社会にはさまざまな言語・文化を背景とする人たちがこれまで以上に多く暮らすことになるでしょう。だれもが安全・安心に暮らすことができる地域づくりのために、地域日本語教室の役割はますます重要になってくると思われまます。
